

【大阪の歴史散歩】

南御堂と松尾芭蕉終焉の地

御堂筋の本町通と中央大通を挟んで北と南の本願時の別院がある。北にあるのが西本願寺津村別院（北御堂）であり、南にあるのが東本願寺難波別院（南御堂）である。この二つの別院が“御堂筋”の由来ともなっている。

南御堂は現在NHKで放映中の人気大河ドラマ“秀吉”の中に出てくる1580年の信長による石山本願寺攻めで滅ぼされたものを、1593年12代目の准如がこの地に再建したもので、京都に東本願寺が完成するまでの間は、この難波別院が真宗大谷派の本山でもあった。この南御堂の境内にある梵鐘は1596年に鑄造されたもので、その右隣に松尾芭蕉の句碑が建っていて

旅に病んで 夢は枯野を かけめぐると刻まれている。芭蕉は元禄7年(1694)9月、伊賀の国から弟子に迎えられて大坂に着いた。しか

し、滞在中に病に倒れ、10月12日、南御堂の向かいで花を商う花屋仁左衛門の屋敷で51才の生涯を閉じた。写真の句碑は芭蕉 150回忌に当たる天保14年(1843)俳人たちによって建立された。南御堂では毎年10月に芭蕉忌法要と句会が開催されている。句碑は船場郵便局の消印にも登場している。

御堂筋を挟んで東側、福德銀行前の緑地帯には『此附近芭蕉翁終焉ノ地ト傳フ』の碑も建っている。芭蕉の臨終の様子や周囲の門弟たちの姿は芥川龍之介の小説“枯野抄”に描かれている。

この芭蕉の句碑や終焉の地はONSA事務所より徒歩5分の所にある。普段、車で、地下鉄で通過してしまい、目にもとめない場所にも大阪の歴史が詰まっているものである。

この場所は、地下鉄『本町駅』⑫・⑬出口より約100m 徒歩1分余程度の場所。

